

オノマトペによる感覚の言語化と共有

—小学校国語科における授業実践—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 高木 万梨乃

1. はじめに

1-1. 研究の背景 国語と他者理解

今日の教育的課題の一つとして、子どもたちの他者理解能力が挙げられる。他者との関係性の構築やコミュニケーション能力、思いやりは、子どもたちが豊かな人生を築き上げていくうえで不可欠であろう。令和4年、文化審議会国語分科会では、言葉のふさわしさに関して、人を傷つける暴力的な言葉遣いがよく見られる状況を放置することへの危惧を取り上げている。また、平成19年、文部科学省は、共同生活を豊かにするために、自己表現、他者理解、意見共有を通じて考えを深めることの重要性を挙げている。さらに「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 国語編」においては、児童が学習の中で、言葉への自覚を高めることが目標の一つとして挙げられている。

「これからの国語科教育はどうあるべきか」（2024）において、言葉を介した他者理解の営みとして、言葉の背景を探ることが大切であると中野裕己氏は述べている。特に小学校段階では、その言葉を使用する他者の気持ちを推し測る経験を積むことが必要であるという。

以上を踏まえて、本研究では言葉を介した他者理解のための一つの方法としてオノマトペを取り上げた授業を実践した。

1-2. オノマトペについて

言葉を介した他者理解のためにオノマトペの活用が効果的であると考えた理由を述べるために、まず、オノマトペについて定義する。小野（2024）の定義では、オノマトペとは、擬音語（または擬声語）・擬態語などと呼ばれてきた言葉の総称である。擬音語とは、ものの音・声などを表した語を指しており、具体例としては、「カチカチ」「ワンワン」などが挙げられる。擬態語とは、音のない仕草や動作を音に表した語を指しており、具体例としては、「うーむ」「ぎくり」などが挙げられる。

オノマトペは、子どもたちにとって馴染みのある日常的な表現であり、まだ語彙が乏しい子どもたちにとって、感覚を表現する上で強い味方になる。たとえば、動詞は名詞に比べて意味が抽象的で捉えにくく、覚えたとしても新しい状況で使うことが難しい。けれども、動詞がないと文をつくることができない。このようなとき、子どもは知っている名詞、間投詞、オノマトペなどを動詞にすると今井（2013）は述べている。例えば、水たまりを飛び越えるときは「エイッってする」、ハサミで紙を切るときは「チョキチョキする」と表現する。オノマトペによって感覚を言語化することで、子どもたちは自分の表現したいことが相手に伝わる喜びを得ることができる。その一方で、オノマトペが感覚的・感性的な表現であるからこそ、互いのなかで生じる感じ方の違いを共有することが、新たな表現の可能性を学ぶことにつながる。このように自分や他者の言葉に立ち止まること、つまり自分が発する言葉の伝わり方や相手が発した言葉の真意に意識を向けることが、他者理解のきっかけになり、子どもの言葉をより豊かにすることにつながると考えた。なかでも、本研究ではオノマトペの可変性、すなわち時代性や気候、地域など、それを使う人の背景が表れやすいことに着目した。そのような特徴を持つオノマトペを共有して感覚の違いを知ることが、他者理解につながると考えたからである。

2. 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

オノマトペが感覚的表現であることを理解し、さまざまな感覚に応じて、使う言葉が異なるということを知るための授業実践を行う。これを踏まえて本研究では、子どもたちが、自分が発する言葉の伝わり方や相手が発した言葉の真意に意識を向ける「言葉に立ち止まる力」を身につけ、言葉に少しでも敏感になるために、オノマトペの学習がどのような効果をもつのかを明らかにする。

2-2. 研究実践校について

- ① 対象校 山梨県公立小学校
- ② 児童数 約300名
- ③ 学級数 17学級
- ④ 対象学級 4学年1クラス/1学級 27名
- ⑤ 児童の実態 離席傾向や注意の持続困難などの特性を持つ児童が多い。活発で口まめである一方で、言葉足らずな言動が多々見受けられる。他者が使用した言葉や自分が発した言葉にあまり敏感でない様子も見受けられる。

2-3. 研究の方法

研究授業全2時間を行い、1時間目においてはオノマトペを知ることを目的とした、2時間目においてはオノマトペには、時代性や気候、地域など、それを使う人の背景が表れやすいことに着目するために、「世代差」「時代差」「地域差」の3つの視点から具体例を挙げて紹介した。そして、言葉を使う人個人によって表現が変わることを実感できるようにするために、既存のオノマトペに囚われずに聞こえた音をそのまま言語化する活動を取り入れた。

授業について、以下の方法で分析を行った。

- ① 映像の録画、ワークシート①・②の配布
- ② 授業映像の文字起こしに基づいた発話の記録、ワークシート①・②の記述
- ③ 4つの分析視点に即した分析

3. 授業実践

- ① 実施日 令和7年11月27日(木) (全2時間)
- ② 単元名 「オノマトペのひみつにせまろう！」

3-1. 1時間目の授業実践

授業を行うにあたって、まず、子どもたちがオノマトペという言葉を理解することが必要である。そこで、全2時間の実践のうち、1時間目においてオノマトペを知ることを目的とした実践を行う。そのなかで、オノマトペに対する理解を深めるために、オノマトペの種類について擬音語と擬態語をさらに細分化した7つのカテゴリーを設定した。(表1)

表1 7つのカテゴリー

種類	意味
①表情オノマトペ	顔の表情について表したオノマトペ
②行動オノマトペ	動作について表したオノマトペ
③自然オノマトペ	自然現象を表したオノマトペ
④鳴き声オノマトペ	動物の鳴き声を表したオノマトペ
⑤気持ちオノマトペ	心情を表したオノマトペ
⑥状況オノマトペ	場所の様子を表したオノマトペ
⑦感触オノマトペ	触った感覚を表したオノマトペ

《本時の目標》

オノマトペがどのような言葉なのか知る。

《授業実践の流れ》

導入の段階では、まずは子どもたちにとって身近な教材を取り上げて、そこからオノマトペという言葉を知る活動を行う。今回は、「ごんぎつね」「おむすびころりん」の2つの教材を取り上げた。オノマトペの部分空欄にして、そこにあてはまる言葉を子どもたちに問いかける。さまざまなオノマトペを子どもたちから引き出したのちに、教科書に記載されているオノマトペを提示する。

展開の段階では、オノマトペにはいろいろな種類があることを知る活動を行う。まずは、擬音語がものの音や声を表すこと、擬態語が仕草や動作を表すことを説明する。その後、イラストを提示してそれにあてはまるオノマトペを子どもたちに問いかけ、さまざまな言葉を挙げてもらう。具体的なオノマトペがいくつか出てきたところで、表1に示した7つのカテゴリー名を提示していく。①表情オノマトペ、②行動オノマトペ、③自然オノマトペ、④鳴き声オノマトペ、⑤気持ちオノマトペ、⑥状況オノマトペ、⑦感触オノマトペというこの7つのカテゴリーをイラストと結びつけ、さまざまなオノマトペがあることを理解する。次に、ワークシート①(図1・2)に、さらに考えられるオノマトペをカテゴリーごとに記入する時間を設ける。最終的に、それを板書や児童の発言によって全体共有することで、それぞれが、各カテゴリーについてどのようなオノマトペを想起したのか、その共通点や相違点を示す。

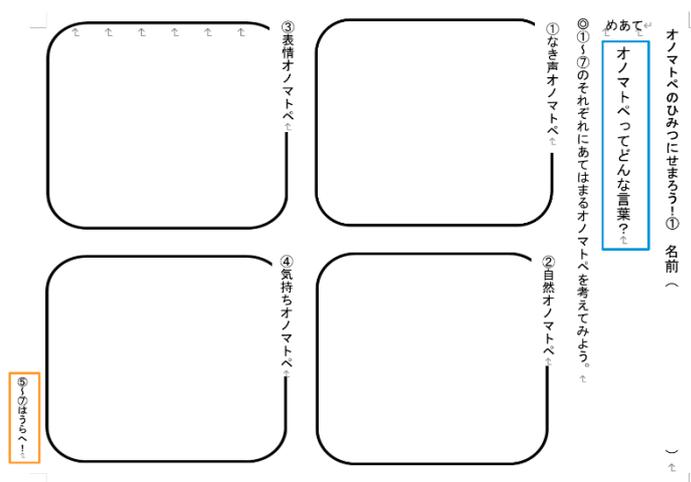


図1 〈ワークシート① 表面〉

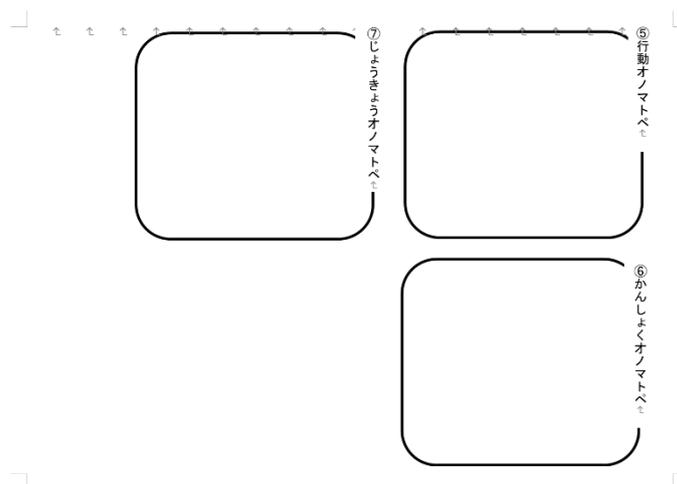


図2 〈ワークシート① 裏面〉

3-2. 2時間目の授業実践

2時間目の実践においては、オノマトペにはそれを使う人の背景が表れやすいことに着目するために、「世代差」「時代差」「地域差」の3つの視点からそれぞれ具体例を2つずつ設定した。(表2)

表2 3つの視点

世代差 〈肉まんの温かさ〉	アツアツ (若者)	
	ホカホカ (年配者)	
地域差 〈桃の食感〉	シャキシヤキ (山梨県内)	
	ねっとり (山梨県外)	
時代差 〈犬の鳴き声・鶏の鳴き声〉	びよ (昔)	カケロ (昔)
	ワン (現代)	コケッココー (現代)

次に、言葉を使う人個人によって表現が変わることを実感できるようにするために、既存のオノマトペに囚われずに聞こえた音をそのまま言語化する活動を取り入れた。その後、日常生活においてもオノマトペによる感覚の違いを実感できるように、3種類の創作オノマトペとその創り方を紹介した。(表3)

表3 3種類の創作オノマトペ

創作オノマトペ	創り方
① あいうえお技	語頭の音を、あいうえお順に沿って変換する。 例) にっこり→なっこり・ぬっこり・ねっこり・のっこり
② 入れ替え技	音の並びを入れ換える。 例) ヨチヨチ→チヨチヨ
③ リン技	オノマトペの語尾に「リン」を付け加える。 例) ペタ→ペタリン

《本時の目標》

感覚の違いによってさまざまなオノマトペがあることを知る。

《授業実践の流れ》

導入の段階では、前時に学んだ7つのカテゴリーについて復習をする。

展開の段階では、オノマトペが感覚の微妙な違いを表し、言葉を使う人の背景によって表現が変わることを実感するための活動を行う。まずは、表2のように「世代差」「時代差」「地域差」の3つの視点を提示して、それぞれどういった組み合わせになるのかを問いかける。このとき、ワークシート②(図3)で、「肉まん」「桃の食感」「犬の鳴き声」にあてあまるオノマトペを児童が記入したあと、その世代、時代、地域によって異なるオノマトペを問いかけ、児童に予想させる。その後、あてはまる組み合わせを提示する。例えば表2に示したように、「肉まん」に関して、若者は「あつあつ」、年配の人は「ホカホカ」と表現することが多いことを紹介して、オノマトペによる表現には世代、時代、地域などの背景によって差異があることを知る。次に、オノマトペが感覚の微妙な違いを表し、言葉を使う人個人によって表現が変わることを実感できるように活動を行う。子どもたちの前で教師(筆者)が紙を2回破いて見せる。1回目はゆっくり破き、2回目は勢いよく破く。動きの速度の違いによって子どもたちが音を書き分けるように促すとともに、聞いた音をそのまま言葉にして表現するように指示する。最後に、表3に示したように3つの創作オノマトペの方法を提示し、日常生活でも実際に創ってみるように促す。

まとめの段階では、オノマトペが感覚的表現だからこそ、そこに自分らしさが生まれてくるということを、これまで取り上げてきた具体的とともに改めて説明する。そのうえで、ワークシート②(図4)にこれまでの学びの振り返りを記入させる。心に残っていることや感想を記入する。

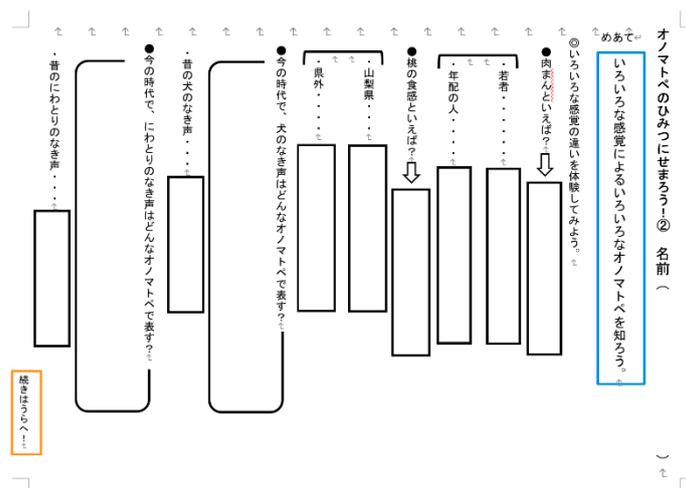


図3 〈ワークシート② 表面〉

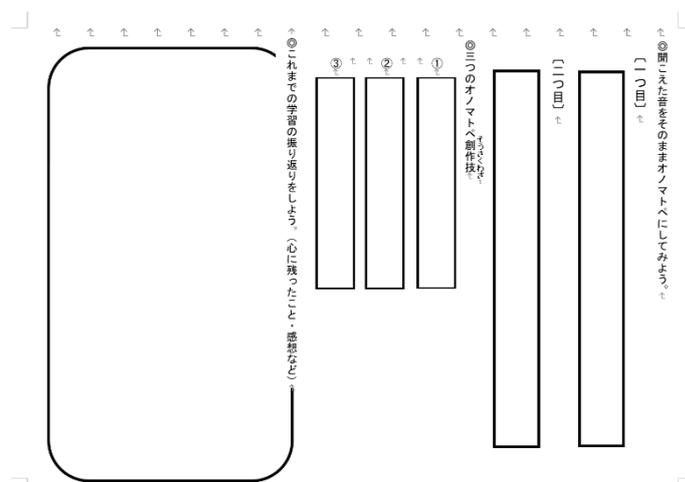


図4 〈ワークシート② 裏面〉

4. 分析の方法

授業映像及び子どもたちのワークシートへの記述を基に分析を行った。

本研究では、オノマトペの可変性、すなわち時代性や気候、地域など、オノマトペを使う人の背景が表れやすいことに着目した。そのような特徴を持つオノマトペを共有して感覚の違いを知ることが、他者理解につながると考えたからである。そのため、授業中の発言やワークシートへの記述から、以下の4つの分析視点に即して分析を行う。

《分析視点①》オノマトペと感覚の結びつき

子どもたちがオノマトペを感覚的表現として捉えているかどうかを探る。発言や記述の中に感覚に関わる語を伴う説明が見られるか、特に五感に関わる語を使用しているかに着目して分析する。

《分析視点②》同一対象に対する複数のオノマトペ表現

子どもたちが同一対象に対して複数のオノマトペが用いられることに気づいているかどうかを探る。複数表現の存在に気づいているとみられる発言や記述に着目して分析する。

《分析視点③》表現の違いと感覚の違い

子どもたちが表現の違いを感覚の違いとして捉えているかどうかを探る。表現の違いが感覚に起因することを捉えている発言や記述に着目して分析する。また、背景の違いと結び付けて説明している発言や記述にも着目して分析していく。

《分析視点④》自分や他者の言葉に「立ち止まる」態度

子どもたちが言葉を吟味し、立ち止まる態度を示しているかどうかを探る。複数の言葉を比較している発言や記述、発言や記述までに言い直し・書き直し・迷いがあるのかに着目して分析する。また、言葉そのものへの着目が確認できる発言も手がかりにしていく。

5. 結果と考察

5-1. 結果

《分析視点①》

子どもたちがオノマトペを感覚的表現として捉えているかに着目して分析を行った。ワークシートの記述からは五感に関わる語を使用している記述は見られなかった。授業中の発言からは、五感に関わる語を使用している言動に加えて、オノマトペから様子や感じ方を説明しようとする言動がいくつか見

られた。例えば、気持ちオノマトペに関するイラストを提示する際に、「ドキドキ」という児童の発言を聞いて「心拍数」と発言をする別の児童が見られた。また、同じ場面において「あせあせ」という児童の発言から、「恥ずかしい」という発言をする別の児童が見られた。

《分析視点②》

同一対象に対して複数のオノマトペが用いられることへの気づきに注目して分析を行った。ワークシートの記述からは複数表現の存在に気づいている直接的記述は見られなかった。しかし、同一対象に対して複数のオノマトペを書き出している児童は多く見られた。例えば、「犬」という対象に対して、ある児童は「ワンワン」「キャンキャン」「クウン」「ガルルル」と記述していた。授業中の発言からは複数表現の存在に気づいている言動が多々見られた。イラスト提示を基にさまざまなオノマトペを考える際に、例えばカエルのイラストが提示された瞬間に「ゲロゲロ」「ゲコゲコ」など異なるオノマトペの発言が同時にされた。

《分析視点③》

子どもたちが表現の違いを感覚の違いとして説明しようとしているかに注目して分析を行った。ワークシートの記述からは、表現の違いが感覚によるものであることに気づいている記述に加えて、さまざまな背景の違いと結び付けて説明している記述も多く見られた。例えば、「人によって音の感じ方違って面白かった」「人によって性格などが違うように、オノマトペの表し方も違うということが分かった」などのような記述が見られた。授業中の発言からも、同様の言動がいくつか見られた。例えば、地域差による表現の違いを確認する際に、「山梨県民は、桃がすぐ近くにあってすぐ取れるからシャキシャキの方が美味しいって感じてるけど、県外の方は、遠いから郵送する時間が長くてねっとりになっちゃう」という発言をした児童が見られた。

《分析視点④》

子どもたちが言葉を吟味し、立ち止まって考えようとする態度に着目して分析を行った。ワークシートの記述からは、複数の言葉を比較している記述は見られなかった。授業中の発言や様子からは、複数の言葉を比較している言動や言い直しや迷いのある様子はあまり見られなかった。一方で、言葉の使い方に関する発言は少し見られた。例えば、「パラパラチャーハンのパラパラって、オノマトペだったんだ」という発言をした児童が見られた。

5-2. 考察

本研究は、オノマトペが感覚的表現であることを自覚するとともに、感覚によって扱う言葉が異なるということを知ることを目的として授業実践を行い、その過程における児童の言動を分析したものである。以下では、分析視点①～④の結果を踏まえ、本実践が児童の言葉への感受性や他者理解にどのような可能性を示したのかについて考察する。

まず、分析視点①の結果から、児童はオノマトペを単なる音のまねとしてではなく、様子や感じ方を含んだ表現として捉え始めていることが示唆された。ワークシートの記述において五感に直接結びつく語の使用は確認されなかったものの、授業中の発言においては、「ドキドキ」から「心拍数」、「あせあせ」から「恥ずかしい」といったように、オノマトペを手がかりに内的状態や身体的反応を説明しようとする言動が見られた。このことから、児童は必ずしも感覚語を直接的に使用してはなくても、オノマトペを感覚や状態を媒介する言葉として捉えている可能性があると考えられる。これは、オノマトペが感覚的・直感的に意味を想起しやすい言語形式であることを示すものであり、言葉への自覚を高める導入として有効であったといえる。

次に、分析視点②の結果からは、同一対象に対して複数のオノマトペが存在することへの気づきが、児童の発言を中心に表れていたことが明らかになった。ワークシート上では複数表現の存在を直接的に

言語化した記述は見られなかったが、一つの対象に対して複数のオノマトペを書き出している児童が多く見られた点は注目に値する。また、授業中の発言において、カエルのイラスト提示と同時に異なるオノマトペが挙げられた場面は、児童が自然に表現の多様性を受け入れていることを示している。このことから、児童は「一つの正解がある」という認識から離れ、対象に応じて言葉が複数存在し得ることを体験的に理解していたと考えられる。

分析視点③の結果は、本研究の目的に最も深く関わるものである。ワークシートの記述および授業中の発言から、児童は表現の違いを単なる言葉の違いとしてではなく、人による感じ方や経験、背景の違いとして説明しようとしている様子を示していた。特に、地域差の事例において、生活環境や流通の違いを踏まえて表現の違いを説明する発言が見られたことは、児童が言葉を社会的文脈と結び付けて捉え始めていることを示唆している。このような言動は、オノマトペが可変性のある言葉であるという特性を生かした実践によって、児童が他者の感じ方を想像し、理解しようとする視点を獲得しつつあることを示すものと考えられる。

一方、分析視点④の結果からは、言葉を吟味し立ち止まって考える態度については、限定的な表れにとどまったことが明らかになった。複数の言葉を比較したり、言い直しや迷いを伴って表現を選択したりする様子は多くは見られなかった。しかし、「パラパラチャーハンの『パラパラ』がオノマトペであることに気づいた」という発言に見られるように、日常的に使用している言葉を改めて言葉として捉え直す瞬間は確認された。このことから、本実践は「言葉に立ち止まる態度」の芽生えを促す段階には到達しているものの、十分な定着には至っていないと考えられる。

以上を総合すると、本実践は、オノマトペを通して児童が感覚と言葉の結びつきに気づき、表現の多様性や他者との感じ方の違いを意識する契機となった点において、一定の成果を上げたといえる。一方で、言葉に立ち止まる力の育成については、単元構成や活動時間、振り返りの方法にさらなる工夫が求められる。今後は、複数の表現を比較・検討する活動や、言い換えを意図的に促す場面を設定することで、言葉に立ち止まる力の育成をより一層図る必要があると考えられる。

本研究は、オノマトペという感覚的で身近な言葉を教材とすることで、児童の言葉への感受性や他者理解の可能性を示した点に意義があると考えられる。

6. 引用参考文献

- ・小野正弘 (2024) 「擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典」小学館
- ・今井むつみ (2013) 「ことばの発達の謎を解く」ちくまプリマー新書
- ・藤森裕治 (2024) 「これからの国語科教育はどうあるべきか」東洋館出版社
- ・文化庁 文化審議会国語分科会 (第 80 回) 「国語に関するコミュニケーション上の課題 (国語課題小委員会における審議経過の整理) (案)」 pp.6 (令和 4 年 3 月 8 日)
- ・文部科学省 言語力育成協力者会議 (第 8 回) 「資料 5 言語力の育成方策について (報告書案)」 (平成 19 年 8 月 16 日)
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領解説 国語編」 (平成 29 年度告示)